

令和 3 年 6 月 30 日現在

機関番号：23803

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K13426

研究課題名（和文）マルセル・ブルーストと美術史学

研究課題名（英文）Marcel Proust et l'histoire d'art

研究代表者

浅間 哲平（ASAMA, Teppei）

静岡県立大学・国際関係学部・講師

研究者番号：00735475

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：ブルーストが受けた当時の美術史家からの影響をさぐり、ブルーストがいかなるコレクションに関心を示したのかを調査し、そして美術批評家と呼ばれるような人たちとブルーストの交流関係を明らかにした。以上の三点からブルーストがどのような知のシステムのもとで美術にたずさわったのかを明らかにしてきた。

この研究の成果の一部はTeppei ASAMA, Proust et les amateurs, Paris, Classiques Garnier, 2020によって公表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ブルースト研究への一定の貢献ができた。しかし、それだけではなく19世紀末に美術に関心をもつとき、フランスにおいてどのような選択肢があったのか、またそのような教養がどのように記述されていたのか、芸術受容についての文化史への貢献があった。

ブルースト研究の範疇にとどまらない、文化史・美術史とブルーストの関係を描き出したことが本研究の大きな成果である。

研究成果の概要（英文）：J'AI ETUDIE LES INFLUENCES QU'ONT EU DES HISTORIENS D'ART, DES COLLECTIONNEURS D'ART ET DES CRITIQUES D'ART SUR MARCEL PROUST. SOUS CES ANGLES, J'AI ESSAYE D'ECLAIRCIR COMMENT CET ECRIVAIN A PARTICIPE AU MONDE DE L'ART A LA FIN DU DIX-NEUVIEME SIECLE. LES RESULTATS D'ETUDE SONT PUBLIES DANS MON LIVRE, PROUST ET LES AMATEURS (PARIS, CLASSIQUES GARNIER, 2020, 389 P.).

研究分野：フランス文学

キーワード：文学 小説 美術史 フランス ブルースト 美術批評 コレクター 展覧会

1. 研究開始当初の背景

作家マルセル・ブルースト（1871-1922）の小説『失われた時を求めて』では、非常に多くの美術作品に言及があることはよく知られている。この芸術についての知はどのような教養・学問が前提になっていたのだろうか。ブルーストが青年期に美術館の学芸員に就こうとした1890年代はフランスにおいて「美術史」が学問として制度化されていく過渡期であり、これは作家が現在の意味での美術史の方法に則ってそれぞれの作品にアプローチしていたのではなく、当時の美術界固有の知のシステムに立脚して、そこで得られた見識を小説に活用していたことを意味する。本研究は、以上のようなブルーストが置かれていた当時の美術史学を背景とするものである。

2. 研究の目的

20世紀のフランスを代表する作家マルセル・ブルーストが、自分の職業として、美術館の学芸員を志していたことはあまり知られていない。1893年、22歳のときのことである。ブルーストは、大学と自由政治学院で法律と外交を学んでいたのだから、「美術史」における学問的な訓練を受けたわけではない。しかし、将来の職業として学芸員を口にしたのは、美術に一定の関心を持っていたからに他ならない。このことは、七巻三千頁に及ぶ大作『失われた時を求めて』に非常に多くの芸術作品への言及があることを見れば、すぐに了解できるものである。

「ブルーストと美術」という主題は、長く研究者たちの関心をひいてきた。1945年には既にMaurice E. Chernowitzによる*Proust and Painting*が発表されている。最新の研究としては、吉川一義によって2010年に著わされた*Proust et l'art pictural*があり、この分野は活況を呈している。本研究の目的は、しかし、以上の研究が目指したようにブルーストの目にした作品を突き止めようとするものではない。そうではなく、作家が置かれた美術史学の知的文脈を再構成することを研究目的とした。

3. 研究の方法

ブルーストが受けた当時の美術史家からの影響をさぐり、ブルーストがいかなるコレクションに関心を示したのかを調査し、そして美術批評家と呼ばれるような人たちとブルーストの交流関係を詳らかにする。以上の三点からブルーストがどのような知のシステムのもとで美術にたずさわったのかを明らかにしてきた。

ブルーストが美術館での仕事を探した1893年は、フランスの美術史学上の大きな転換点であったことはまったく議論されてこなかった。すでに2017年度の研究実績で概要を紹介したように、美術の制度史の専門家Genet-Delacroixによると高等教育における美術史の発展は三つの時期に分けられるとされ、第一期は1863年のニューヴェルケルク（1811-1892）による美術学校（エコール・デ・ボザール）の制度改革に始まり、1893年のソルボンヌ大学における「美術史」の講座設置までとされている。この年にはじめて美術についての近代的学問が制度化されたということである。ブルーストは、つまり、この学問としての美術の勃興と時を同じくして美術館での学芸員の職を目指したことになる。1893年以前の大学では芸術についての専門的な教育を受けたくとも受けることができなかったのだ。この年、ソルボンヌで開講されたのは古代と近代の美術史であったが、中世美術史の講義が正式に誕生するのが1913年で、ここまではGenet-Delacroixが考える第二期である。こうして大学における美術史が教育制度として完成した。ソルボンヌ大学における中世美術史の開講に大きな役割を果たしたのが、エミール・マール（1862-1954）とその博士論文『フランス十三世紀の宗教芸術』（1898）である。研究者の間ではよく知られているように、ブルーストはこの専門書を知悉し、自らの作品でその描写などを利用していった。こうして第三共和政が幕を閉じる1940年までの間、大学教育・研究における美術史学の見解が発展していくことになり、まさしくその間にブルーストの『失われた時を求めて』（1913-1927）が発表されたことになる。ブルーストは、美術史学が制度として成立する三つの時期すべてを経験し、その複雑な事情が作品の中に見え隠れしている。このような知の形成期をブルーストがどのように生きたのか、ジャン＝ルイ・ヴォードワイエ（1803-1872）、エミール・マール、バーナド・ベレンソン（1865-1959）等との交流から、具体的に描き出す方法を採用した。

19世紀後半に大学と異なる形で美術界と関わっていたのは、画商やコレクターだった。前述したように、吉川の仕事はブルーストが目にした絵画を特定することを目指すもので、作家が言及している絵画をどこで見たのかも明らかにした。しかし、本研究は、言及がなくても見ていたはずの絵画がどのような傾向であったか、どのような美術に対する趣味をブルーストが持って

いたか明らかにできると考えた。このときに注目すべきは、画廊や個人コレクションの存在である。実際、そのような観点でプルーストの文章を読んでいくと、いかに頻りに画廊やコレクターのもとに通っていたのかが垣間見える。19世紀はルーヴルに代表される公的な美術館の公開とともに、画商や個人コレクションが大きな意味を持つようになった時代である。フランスにおいて今日見られるような画商が現れたのは1820年代頃であるが、世紀半ばにはその活動は作品の流通において無視できない広がりを持っていた。プルーストが参照したバルザックの『従兄ポンス』(1846)やゾラの『制作』(1886)といった小説の中でも取り上げられていることから、その活躍ぶりがうかがえる。このような画商の仲介によって、多くのコレクターは同時代の芸術家たちの作品を蒐集することができるようになったのである。こうした芸術受容のあり方は、印象派の画家たちの活躍の前提となったことは広く知られている。プルーストが目にした絵画についての研究は、その性格上、大画家の傑作を中心に据えた今日の評価を中心にせざるを得ない。美術館などが恒久的に所蔵する作品ばかりが対象になるのはそのような理由による。本研究は、プルーストと関係のある画商や個人コレクターを調査することで、作家が生きた芸術的環境をより忠実に明らかにしようとした。2018年度の研究実績でその概要を示したように、今日の美術史の主流とは異なる文脈の中で、プルーストの作品をとらえ直すために、特にデュラン＝リュエル(1831-1922)、ジョルジュ・プティ(1856-1920)、シャルル・エフルッシ(1849-1905)と築いた交友関係を調査し、プルーストの美的生活を照射する手法を採用した。

美術史家とも画商・コレクターとも異なる美術の世界が、美術批評家と呼ばれる人たちによって形成されていたことも忘れてはならない。美術についての専門的な教育や直接的な作品の所有とは異なるアプローチをした者たちのことである。プルースト自身もこのような美術への関わり方をしていたと言ってよく、従って、この圏内に入る人たちとの交流は活発だった。この美術批評家の代表はロベール・ド・モンテスキウ(1855-1921)である。モンテスキウを中心として美術批評家たちが結集していたわけだが、このような人々によって残された美術批評がどれほどプルーストに影響を与えたかを調査し、今では顧みられる機会のない美術批評家の文章をプルーストが利用していることが明らかになってきた。例えば、その一人がジャック＝エミール・ブランシュ(1861-1942)である。また、ラスキンの紹介者としてばかり注目されるロベール・ド・ラ・シズランヌ(1866-1932)からの影響はプルーストのイタリア絵画の見方にまで及んでいたことが次第にわかってきた。つまり、本研究では、これらの美術批評家の一人としてプルーストをとらえ、その集団の中での交流関係を調査することで、プルーストが美術批評界との間に築いた関係を詳らかにするというアプローチがとられた。

4. 研究成果

これまでの調査によって、プルースト研究への一定の貢献ができた。その成果の一部は **Teppe ASAMA, *Proust et les amateurs*, Paris, Classiques Garnier, 2020** によって公表することができたと考えている。

しかし、それだけではなく19世紀末に美術に関心をもつとき、どのような選択肢があったのか、またそのような教養がどのように記述されていたのか、芸術受容についての文化史への貢献がなされた。

① INHA(国立美術史研究所)によって構築中のフランス革命期から第一次世界大戦までに活動した美術史家データベースは制度が完成する以前の美術界についての研究であるが、本研究は、そのような美術史の潮流にも寄与するものとなった。一つだけ挙げるとすれば **La Société artistique des amateurs** という芸術団体とプルーストの関係についてこれまで調査されたことがない分野においても一定の成果をおさめた。

② ル・マン大学の研究者グループが「**Amateurs en sciences (France, 1850-1950)**」というテーマで大規模な研究を進めているが、本研究はそのサイトでも紹介され、参照されるべき書籍とされている (<https://ams.hypotheses.org/2010>)。

③ また、**Bertrand Tillier** が本研究の成果の一つとして指摘したのは、プルーストとレオン・ローゼンタールの関係である。すでに忘れられた美術史家のようにも思えるが、最近になって再び注目を集めているのは、次のようなサイトが立ち上げられていることから知られる (<https://leon-rosenthal.fr/>)。

すべてを列挙することはしないが、以上の3点のようなプルースト研究の範疇にとどまらない、文化史・美術史とプルーストの関係を描き出したことが本研究の大きな成果であると考えている。

これらの成果から見えてきたのはプルーストにおける「アマチュアリズム」の重要性である。ある定められた方法に則って専門的知見を資料に基づいて披露する専門家としてではなく、いくつもの間違いを含みながらも自由にそして記憶を頼りにエピソードなどを含めて話すように記述していくのが「愛好家」であるとするれば、プルーストは後者に近い存在であることは間違いない。この作家がどのようにしてアマチュア文化をとり入れ、どのようにしてそれを小説という

ジャンルの中で表現したのかを考察するという新たな課題が見えてきたのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 浅間哲平	4. 巻 19-1
2. 論文標題 モーリス・ジュヌヴォワを知っていますか？	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際関係・比較文化研究	6. 最初と最後の頁 91-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 浅間哲平	4. 巻 19-2
2. 論文標題 パリを裏側から見る ボードレール、ワイルド、ゾラの視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際関係・比較文化研究	6. 最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Teppei Asama	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Classiques Garnier	5. 総ページ数 389
3. 書名 Proust et les amateurs	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------